

『季刊 新児童文化』一九四七年九月（国民図書刊行会）

教科書に見るアメリカの児童文化

矢口 新

(一)

アメリカの初等教科書を見ると、アメリカの持つ児童文化の豊かさが思われる。それはどの一冊をとって見ても、分量が多くて、かつその中に色彩に富んだ挿絵や、図解、図表等が豊富に含まれている所からも来るし、更にそういう美しい教科書の種類が多いという所からも来るのである。こういう豊穡な教科書文化を持つアメリカ児童の幸福をしみじみ思わずにはいられない。しかしそれを一般に考えるように単純にアメリカの富の豊かさのみ原因づけるとしたら短見である。もちろんそれがないわけではないが、それより根本に大きな原因があるということを考えなくてはならない。この事はアメリカのそれらの教科書を子細に調べてみると、自ら明らかになることである。

アメリカの教科書を見る場合に大切な事は教科書についての考え方が、日本のそれとは大いに異なっているという事である。一般に知られているように、アメリカは日本のような国定教科書制度をとっていない。また州定教科書制度というものもない。教科書制度は自由出版制となっている。従って幾種類かの教科書が多く出版社から発行されている。各州はそれらの教科書から適切なものを数種類選んで指定するというのが大多数の例である。各学校は更にもの中から種々の条件を考慮に入れて自己の学校に適切と思われるものを選択して使用するのである。従ってできるだけ多くの州に採用を願う教科書出版社

は競ってすぐれた教科書を作成するのである。これが一つに優れた教科書が何種類も出る理由であるが、尚それだけではない。もっと根本的な理由がある。

それは教科書が学校で使われるときの使われ方にあるといつてよいのである。何故なら教科書の使われ方が教科書のあり方を決定し、如何なるものとして教科書を作り出すかという事を規定するからである。

アメリカの進歩的學校では一学級の児童が使用する教科書は必ずしも一種類ではない。アメリカの多くの州では教科書は學校が購入して児童に使用させることになっていて、いわゆる自由教科書制であるが、そういう場合に例えば一学級三十人の児童に一種類の教科書を三十冊準備するのではなくして、幾種類かの教科書を合せて三十冊購入するのである。児童は教師の指導によって自分に適した教科書を使用する。もちろん基礎的な訓練をするようなもの、例えば国語の基礎読本、数量図形に関する基礎的な訓練をする教科書についてはそうではないけれども、その他の内容を学習させるもの例えば、社会科、理科等の教科書に就いてはこういう方式がとられている。

こういう風に幾種類かの教科書を使用するということは日本のような学習形態ではありえないのである。それは学習形態が非常に異なっており、そこにおかれている教科書の意味も異なっているからである。

日本の教科書には一斉教授によって教えられるべきもの、覚えるべきものが整然と並べられている。内容は教授を行う場合の骨組みとなる精髓である。こういう教科書は教師が児童に教える筋書となっているものであり、従って教師の児童に対する教育の通路としての意味をもっていると考えられねばならぬ。教師と児童はその教科書において接触するのである。教師はこれを通じてその指導力を発揮するのである。少し極端に言えば日本の教科書は教師のために編まれているとも考えられるのである。

これに反してアメリカの教科書は児童自らが読むものであり、事実そういうものとして編成されている。従ってあくまで児童読みものである。それは日本のように教師が児童に接触する通路ではない。

アメリカの教科書はどれを見ても児童に出来るだけおもしろく読ませようという工夫がめぐらされている。公民的教材でも、歴史的教材でも、地理的教材でも、理科教材でもみな物語風なスタイルを以って児童の興味を惹きつけようとしている。また児童が自ら読みこなすことができるように、使われた語彙に関する説明も附されており、索引もつけられているという親しさである。それだけでは教科書としての性格をもっているとは言えないかも知れないが、これを教育に使用するために特別な配慮がなされてある。全て教科書には各学習単元、章節の終りに、児童が自ら読んだことを整理し、テストし、更にそれを土台として学習を発展させるための種々な整理問題、作業課題、討議問題等が設問として置かれてある。或はまた各教科書にはワークブックなるものがついていて、そこで問題に記入することによって児童の学習を指導するようになっていく。

これらの教科書の設問や、ワークブックは児童の学習活動のプログラムを示しているものであって、教師と児童の接触は主として、ここにおいて行われる。教師の指導はこのプログラムに従って児童が活動する場面において行われるのである。教師の教育の通路はこのプログ

ラムにあるわけであって、教科書自体にはないのである。教科書の内容は児童がプログラムに従って活動する場合に児童が自ら読んで参考とするべきものであり、学習を発展させる土台を与えるものであるに過ぎない。内容を教える教科書においては教科書はもはや教師が児童に読んで説明するものではないのである。そういう学習形態がなくなっているとさえ云えるのである。

こう見て来ると教科書は純然たる児童読み物であって、謂わば児童文化の輯録としての性格を強く持っていると言えるのである。

アメリカの教科書が豊かな感じをわれわれに与えるとすれば、その根本的な原因はここにあると言わなければならぬ。それは大事なことだけを書いたもの、知識の骨組みを書いたものでなく、反対にできるだけ豊かな文化の世界を児童が読みこなし得るように準備してやろうとする考え方にある。それは大人の若い世代に対する思いやりに溢れている。これは教科書観が日本と全然異なっているからだと言えるべきである。

これを換言すれば、アメリカは教科書を児童のもつ文化として作り出そうとしていると言う事ができる。アメリカの教科書はすぐれて児童文化的であると言う事が出来るのである。

しかしそれは、會つての児童中心主義的な孤立した児童のみの世界で文化を取扱おうとしているのではない。むしろ反対に大人と子供の接触する現実の世界を取り扱っているのである。教科書の中に盛り込まれた教材は決してそんなアブノーマルな児童のみの世界から取られているのではない。否はるかに現実的である。といつても単に大人の準備として子供を考えて大人になってから必要な教材を与えているのではない。況や大人の貧困なものとして児童の世界を置いて教材を整えているのでは無論ない。いわば大人も含めた現実の世界を児童の世界観をもって構造づけた教材といえよう。教科書文化の世界はこういう児童の世界である。従ってそこには最近の児童心理学の発達も余す

所なく吸収されている。

アメリカ教科書のすぐれた児童文化性はこういう考えから出てきたものと思われるのである。

最後に、この事に関しては教科書の編纂者が多く初等学校の教師であることも注目しなければなるまい。彼等はその職務からして何といつても児童文化の最上の担当者である。彼等がその本来の職務を自覚して生み出したものが、アメリカ教科書なのである。児童に接することの少ない学者や事務家が単なるデスクプランをもって児童文化を生み出せる筈のものではないのである。アメリカの教科書がすぐれた児童文化を作り出している根底にはかくの如きことが考えられねばならぬのである。

(二)

アメリカの教科書が児童の読み物であり、参考書であることは、アメリカの教科書観が、日本のそれと著しく異なっていることからくるものであるが、それは結局は教育観の差異でもある。アメリカの教育は自学的であり、日本の教育のごとく教えられたものを覚えるという形にはなっていない。この点はアメリカ教科書に非常に明瞭にあらわれているが、これを児童文化に即して言うならば、アメリカの児童文化は如何に児童の創造性を強調しているかという事である。次にこの点について考えてみたい。

日本の教育では教えること、これを児童の側から云えば覚えることであるが、それがちゃんと決められていて、それをどれだけ覚えたかが教育の成果をはかる尺度となっている。その成果をはかるために種々な試験や考查が行われる。

アメリカの教科書は覚える教科書ではないのである。児童は教科書を自ら読むけれどもそれは記憶するためではない。中にあることを理解することが大切なのである。一例をあげるとマクガイヤーの書いた

『過去―それは再び生きている』という歴史の教科書の序文にこう書いてある。「一つの物語を一気に読み通して下さい。読んだ事を記憶しようとしてはいけません。物語の場面を頭に描きだそうとしてください。読み終わったら終りにあるテストや学習指針を見て自分で試してください。もし必要なことで忘れたことがあればもう一度読み返せばいいのです」と。日本では歴史は暗記物などと言われているが、アメリカの歴史教科書はこういう考え方でつくられている。

アメリカの教科書が覚えるためのものではないという事は、アメリカの教育がそういうことをしていないという事である。その教育の方式はまた教科書に明らかにされている。

アメリカの教科書が覚える教科書でないという事は教育に於て覚えることがなくてもよいという事ではない。必要な事はもちろん覚えなくてはならない。そういう事も十分に含まれている。しかしそれは児童が学習を進展させる場合に自然に身につけるように仕組まれている。すなわち覚えることが目標ではなく、大切なことは考え方を理解し、身につけて、考える事が出来るようになることであり、行動のしかたを身につけて行動し得ることである。そのために必要な事は覚えなくてはならないのである。だから覚えることはそこに位置づけられている。若し必要なことでミスしたことがあったら、また読み返せとマクガイヤーが言うのはそういう意味である。

児童は教科書の読み物を参考とし、土台として自らが新たなものを想像することを要求される。教科書の各学習単元の後尾にある作業課題や討議課題はこういうものとしておかれている。児童はそこでいろいろな形式で発表することを要求される。自ら物語を作成して学級に発表すること、劇をつくり上演すること、ジオラマを作ること、見学して自ら調べること、調べた材料をグラフ、統計表にまとめること、報告書を書くこと、模型ポスター等を作成して発表すること、またこれらの事柄について討論し合い意見をまとめること等である。これが

学習の本体をなして、覚えることはこれらの諸活動に必要なものとしておかれているのである。

教師の児童に対する指導はこの創造活動の場面に於て十分に発揮される。教師はこの活動を指導しつつ各児童の個性を観察し、その能力を十分に発揮させるように努めるのである。ここでは児童が一定の知識の量を覚えたかどうかは問題でない。個々の児童が如何なる特性を持ち、如何なる方向に特有の才能を発揮するかであり、如何にしてその特性を発揮せしめるかである。能力のある児童も、ない児童も自分の持つ力を十二分に生かして働かせることが教育の目標となつて来る。如何にして一定量の知識を児童にたたき込むかではなくして、如何にして怠惰な児童を活発ならしめるかという事である。教育は単なる教授ではなく性格を形成することにある。即ち如何にして児童の創造性を発揮せしめるかという事になる。

アメリカの教科書観は実にかくの如き教育観に基いているのである。こういう教育を行うために教科書が如何にマッチしているかという事は上述した通りである。アメリカの教科書文化は実にこの教育観の上につくられたものである。

かくしてアメリカの教科書に現れた児童文化の一つの特性は児童の創造性を問題にしているところにあるといえよう。言い換えればアメリカ教科書に於て見られる児童文化は、大人から児童に与える文化でなくして、児童の創造的文化の上に立っているといえよう。

ここで同時にこの創造性は協同性を常に持っているという事に注目すべきである。前にあげた児童の学習活動を見ても、その創造活動は悉くがまた協同作業によって果さるべき事が要求されている。個人的に要求される学習は単に創造的学習の基礎として一必要なこととして要求されるのであって、その他は殆ど協同作業の形を以て行われる。これは創造という事を協同の地盤の上において考えていると見るべきであるが、文化に対する態度としては本質的に正しい態度である

ると言えよう。如何なる天才の創造といえども社会の協同なくしてはこれをなし得ない事は明らかである。そういう意味で協同性が創造性の地盤に置かるべきは言うを俟たないであろう。アメリカ教科書にみる児童文化はこういう協同性の上にたてられた文化であるといえる。次にアメリカ教科書の持つ最も重大な特性としてそこに盛られた児童文化が著しい社会性を持つていることについて考えなければならぬ。或は別な言葉で言えば児童文化の現実性である。

アメリカの教科書が児童のものであって、教師のものでなくなっている事は、教科書の持つ児童文化の性格に大きな変革を与えて見ることが出来る。従来日本では教科書の持つ児童文化は極めて貧困であつて、辛うじて国語の読本に於て児童文芸的なものが採り入れられたにとどまっている。その他の教科書に於ては児童文化等は問題にすべき所迄行っていないとさえ言い得るのである。そういう国語読本以外の所に児童文化の領域がある等とは夢にも考えない狭い見解の中に閉ぢこめられているのである。従つて、児童文化といえれば直に児童文芸を考えるほどの錯覚をさえ生じせしめるのである。

アメリカでは教科書を純然たる児童読み物として置いた結果、教科書の取材するすべての領域がいずれも児童文化の問題領域として取り上げられた。即ち公民教材も、歴史的教材も、地理的教材も何れも児童文化の領域として取り上げられるに至つたのである。前にも述べたように児童の世界は大人の世界を貧困にしたものではない。それは大人の世界と交錯したものであつて、しかも児童の世界の構造を持つた世界である。この世界構造の中で児童は児童なりに、社会の研究を行い、自然の研究を行っているはずである。だからそこには児童文化を建設すべき大きな領域がひらかれている。アメリカの教科書はこの領域に於て高い児童文化を建設しようという意図を見せている。

周知のようにアメリカは公民と地理、歴史を綜合してソーシャル・スタディーズ(社会研究)として置いている。この社会研究の教科書

を見ると如何に豊富な児童文化の領域が開かれてあるかがわかるのである。今この社会研究の教科書によって児童の社会研究が如何なるものであるかを紹介してみよう。

社会研究の一年生の教科書に『ピーターの家庭』というのがある。これはピーター一家の三人の子供を主人公とした家庭生活の物語であつて次から次へと新しい事件が起つて読むものをして興味をわかせるようにできている。この物語の中に児童は家庭生活の意義、家族の構成、社会との関係道德等について学ぶのである。それは大人のもの子供に押しつけているのではない。子供の世界の出来事である。しかし子供の実の世界の事でない。発展すれば大人の世界に通ずるものである。例えばこんな話がある。兄と妹が何をして遊ぶかという事で意見が別れる。兄はボール投げがしたいと言う。妹は学校ごっこがしたいと言う。両方とも意地になつてそれでは別々に遊ぶよという事になる。妹は人形を並べて学校ごっこを始める。兄は犬をつれて外へ出ようとする。これでは両方とも遊びは成立たないのである。所がこの時、犬が学校ごっここの側について外へ出ようとしな。すると兄が、「ポチや、お前まで学校ごっこがしたいなら僕も学校ごっこに賛成しよう」と折れる。こうして兄と妹の意見の衝突が解決する。これは兄妹の間に起こり勝ちな問題に直接触れた具体的な物語である。その中で児童は児童なりに社会関係のあり方について研究をしているのである。そうしてそれは大人の世界にも通ずるものとなっている。

二年生の教科書に『町や田舎での共同生活』というのがある。これも全篇同一主人公が活躍する物語りとなつてはいるが、その中に村に学校の建設をする物語がある。村に単級学校しかないので大きな学校をつくりたいという話が大人の間に出る。狭い教室で勉強している子供達はそれを聞いて喜ぶ。村人の中には反対意見もある。いろいろな場所で見解が交換される。それらを父親から聞く度に子供達は一喜一憂する。そうしてどうしたらよいかと頭をひねる。新聞やラジオでも論

ぜられる。子どもたちは大きな関心をもってこれを見守っている。やがて学校建設の是非を決する投票が行われ学校が建てられることになる。子どもたちは大喜びで学校建設の企画をする。敷地とか、校舎とか運動場とかをどうするか子供達の間でも真剣に論ぜられる。やがて資材が運ばれてきて建築がはじまる。子供達はそれを見たり手伝いながら一つの建築物が如何なる資材と労力によつて出来上がるかを学ぶ。やがて校舎が出来上がる。次は運動場である。子供は子供なりに構想を描きながら樹木を運び花壇をつくる。かくして立派な学校が出来上がる。最後にこれを読んだ児童達に自分の住む町や村の学校の状態をこの話の筋に従つて調べてごらんなさいと要求してある。児童達は恐らくおもしろがつて更に深く生きた現実の社会の研究に突入するであろう。ここに社会研究が児童のものとして、即ち児童文化として立派に建設されているのである。

歴史教材も地理教材も理科教材も何れも同様に大人の世界の押しつけでなく児童の世界のこととなっている。

かくの如く今迄かえり見られなかつた所に児童文化の世界が新しく拡げられて来た事は、アメリカ教科書の大きな児童文化への貢献として受け取らねばならぬ。アメリカ教科書の取り扱う児童文化の領域が今迄にない広域をもっている事を我々は特に注目しなければならぬ。アメリカの教科書は拡大された児童文化が如何なるものであるかを明かに示してくれるのである。